

編

集

後

記

◇創刊号が興奮であつたとすれば、2号は余裕と落ち着きの中で出すことができた、と言える。先蹤があるということは大切なことだ。落ち着きと言え、それは開設四年目を迎えた国文科にも言えること。国文科にも、本学会にも徐々に伝統が生れつつあるのを感じる。

◇西尾先生の講演をもつて巻頭を飾ることができたのは喜ばしい。講演は学長着任直後の多忙期にお願いしたのだが、快く引き受けていただいた。着任もない「学長」の講演のためか、寛いだ内容だったにもかかわらず、終始神妙だった学生のおももちが印象に残っている。「文化原理と反近代の文学」を寄せて下さった三田先生は泉鏡花研究の先駆者的存在。十年來のテーマを本誌のために執筆されたことに感謝したい。

◇花月文庫の写本を翻刻した宮崎さんは国文科一期生で、現在は上田市の農協勤務。多忙をおして苦心の翻刻を寄せてくれたが、今後も卒業生の研究が継続して掲載できれば、理想的であろう。

◇卒業研究の佳作は今年も5編。「論文」としてはもとより未熟だが、もちろんこれは二十歳という座標の中で評価されるべきもの。この卒業研究の体験が将来どう生かされるか、二期生の今後に期待したい。

(天野)

昭和六十一年三月三十一日発行

学海

第二号

発行者 上田市下之郷六一〇
上田女子短期大学

国語国文学会

会長 塚田 清策
〇二六八(三八)二三五二

印刷所

上田市問屋町二三七一五
田辺印刷株式会社
〇二六八(三二)一四九二

題字・塚田 清策